

星野 泉 明治大学政治経済学部教授

江戸は8代将軍、徳川吉宗の時代、享保の改革では、財政再建のための年貢を増やし、五公五民。勘定奉行が「胡麻の油と百姓は絞れば絞るほど出るものなり」と言ったとか。江戸時代、年貢は、「百姓を生かさぬように殺さぬように」徴収され、ことわざや落語にも出てくる「これが年貢の納め時」よ。諦めにも似た表現となる。さらに昔、鎌倉時代から守護、地頭なる公務員のような役職があり、「泣く子と地頭には勝てぬ」「長いものには巻かれる」などと、これまた諦めにも似た境地で表現されている。

こうした歴史のせいか。農耕民族である日本人の心の中には、今日でも年貢が振り替わった税金とは嫌なものという感覚が植えつけられてきているようだ。英語では、税を納める者をTax Payer、税支払者であるが、日本語では、納税者。実質的には同じでも、強制感、上下関係を感じさせる言葉になっている。しかし、そもそも税は、強制、無償。サービスの対価ではなく、払った額に応じて給付やサービスが受けられるものでもない。負担の結果を享受するのは社会である。ただ、負担感は心の奥底に入り込んでしまっているもので、どうにもならないといえなければならないが、その原因を改めて吟味しなくてはならない。

ほしの いずみ

立教大学大学院博士後期課程研究指導修了。経済学修士。明治大学政治経済学部助教授を経て、1997年から明治大学政治経済学部教授。専攻は財政学、地方財政論。

著書に『財政のかたちは国のかたち—財政再建のための30のポイント—』（朝陽会、2022年）、『自治体財政を読みとく』（イマジン出版、2022年、共著）、『スウェーデン高い税金と豊かな生活』（イマジン出版、2008年）など。

国民負担率が45%を超え、5公5民だといわれるが、江戸時代には、コミュニティの助け合い、親族家族の互助はあっても、社会保障に類するものは乏しい。大正時代には、夕焼けを姐やに背負われて見るといふ歌詞の童謡三木露風作詞「赤とんぼ」の世界。子守娘や家事手伝いのために奉公に出されるケースもあり、彼らは子育てなどに従事した。

2005年から2年ほど北欧に住む機会があったが、税金や政府、公務員に対する考え方がかなり違うようで、払ったものは戻ってくる、政府に貯金する、そう考えている多数の人に出会った。スウェーデンの所得税は最低税率が30%、消費税は税率25%、なぜそんなことが可能となるのか。高福祉高負担が強調される北欧福祉国家であるが、高福祉高負担とは、反対から見ると、高い税金によって低可処分所得、少ない手取り、すなわち使い道を自分で決められる部分が小さい。その代わり、困ったとき、いざという時頼りになる公共部門ということである。

石弘光先生が政府税制調査会長の時代、2004年の記者会見の際、発泡酒やビール風酒類の出現について「低価格競争を誘発し日本の酒文化を損なうもの」と批判した。当時はまだ、今日のようなSNS全

盛時代ではなかったが、高い酒税を回避する商品を提供しようと苦心する企業努力を無にするものとの批判もあった。税金を回避し税込み価格の安い商品を作るための企業努力。これもイノベーションとして受け入れなくてはならないのだろうか。

今月号は、近年の、というより、長く日本に蔓延する、減税志向を取り上げる。選挙のたびに減税が争点となり、選挙が終われば、それが実現するかどうか注目が集まる。給付付き税額控除の議論といっても、皆が給付に期待する。かつて、ピーコック、ワイズマン両教授が、イギリスの財政規模に関する歴史分析から転位効果論を提示した。戦争のような社会的動乱を経験すると財政規模は急拡大するが、戦後元の水準に戻るかというところでもない。一旦、階段状に上昇した財政規模は戦後も下がらないという。負担水準に慣れてしまい、引き下げ圧力とはならず、第2次大戦後は、戦後福祉国家形成の財源となったという。低い負担に慣れるという意味では、逆も真なりか。

情報工学の分野から社会科学分野でも利用可能なアプリが開発されたということで、名古屋工業大学の白松先生にご寄稿いただいた。税に納得感を与えるアプリということである。■